

英語語彙における二重語——時代背景からの考察

安 達 一 美

(武庫川女子大学英語文化学科)

English Doublets and their Historical Backgrounds

Adachi Kazumi

Department of English, School of Letters,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

Doublets are the words that are cognates but are different in forms and/or in current meanings. Borrowed words reflect cross-cultural history and so do doublets, especially because they were adopted via different routes and at different times. This paper aims to clarify what motivated the borrowing of doublets in the English vocabulary and how doublets are related to historical events and social conditions. Therefore, the Italic, Germanic, and Greek doublets in the English vocabulary are classified according to the centuries when they were formed, and their backgrounds are discussed.

1 はじめに

イギリスは島国ではあるがヨーロッパの孤島ではない。ヨーロッパの国々は常に他国と、友好的にあるいは敵対的に、関係を持ちながら発展していった。イギリスも例外ではない。低地ゲルマン語を話していたアングル族、サクソン族、ジュート族が5世紀の中ごろブリテン島に移住して英語の歴史が始まる。彼らが大陸に居住していた頃より、ローマ人の軍人や商人からラテン語を取り入れるなど、英語は異なる民族や文化との接触を通して非常に柔軟に外国語から語を借入してきた。英語が語を借入した言語の数は120以上に及ぶ¹⁾。The Oxford English Dictionary(OED)に見出し語として取り上げられた語のうち借入語は169,327語あり、そのうちラテン語が50,725語で30.0%、フランス語37,032語を含むロマンス語が56,184語で33.2%、ドイツ語12,322語を含むゲルマン諸語が32,856語で19.4%、ギリシア語が18,675語で11.0%である²⁾。

借入語の中には別々の見出し語であっても同一語源の語がある。同じ語源の語が、異なる時期に数度借入されたり異なる言語を経て英語に入ったりして、形態や意味の異なる別語になったのである。これらを二重語と呼んでいる。このような現象は英語に限らず他の言語にも起こりうるが、英語は様々な言語からの借入を通して世界で最も豊かで混濁性の強い語彙を形成したため、多くの二重語が生じたのである。

英語は、キリスト教伝播、ヴァイキングの侵入、ノルマン・コンクエスト、修道院改革運動、フランスにおける英領の喪失、百年戦争、黒死病(ペスト)の流行、印刷術の導入、ルネサンス、宗教改革、新大陸発見、産業革命と科学技術の目覚ましい発達などが要因となって、語彙を増大させていった。殊に、二重語の借入時期や経路の多様性は、ヨーロッパの諸民族や諸文化が緊密に接触し合っている様子や、何れの時代に何れの文化が優位を誇っていたかを例証している。

そこで本論文では、二重語の大部分を占めるイタリック系、ゲルマン系、ギリシア語系の二重語とそれらが成立した時代の背景にある歴史的・社会的状況との関係を検証してみる。取り上げた二重語は292組(イタリック系176組、ゲルマン系71組、ギリシア語系45組)である。そのうち、三重語以上のものは、

イタリック系の三重語 21 組, 四重語 5 組, 五重語 1 組, また, ゲルマン系の四重語 1 組, 六重語 1 組, そして, ギリシア語系の三重語 4 組, 四重語 1 組が含まれる。二重語が成立した世紀とは, 二度目の借入によって二重語となった世紀を意味する。ただし, 三重語以上の場合は, それぞれ二重語, 三重語などになった世紀を考えるため成立した世紀は一度とは限らないことにする。

2 古英語期に成立した二重語

古英語期に成立した二重語は 15 組(ゲルマン系 14 組, イタリック系 1 組)である。ゲルマン系二重語はすべて本来語内で生じたものであり, イタリック系はラテン語からの直接借入対古フランス語経由の組み合わせである。ラテン語起源のものは 1 組だが, この時期に借入したラテン語が, 後の再借入によって二重語を生じさせることになった。ラテン語との接触は, ブリテン島移住前に大陸でローマ人と接触したときのもの, 移住後のキリスト教改宗にともなうものがある。

アングロ・サクソン人は, 大陸のローマの軍人や商人と接触して, AD400 年頃までに 172 語のラテン語を英語に取り込んだと見られる³⁾。一番多いのは植物と農業の分野であるが, その他に軍事, 商取引, 衣食住に関係する語彙などが含まれていた。その頃の借入語で後に二重語を生じさせることになるものに, 植物の plum や商取引の用語である mint, dish, inch などがある。mint(OE *mynet*)は古英語において 7 世紀に生じた i-umlaut を経ており, dish(OE *disc*)は AD400 年以前にラテン語に生じた母音 i の変化を経ていないので, いずれも大陸時代にラテン語から借入したものである⁴⁾。mint は 14 世紀にラテン語から古フランス語を経て英語に借入された money と二重語を, dish は dais(13c), desk(14c), discuss(17c), disk(18c)と五重語を形成することになる。

ローマ教会によるアングロ・サクソン人のキリスト教化は, 597 年のアウグスティヌスによる布教に始まる。彼は後に法王権の基礎を築くことになる法王グレゴリウス 1 世によって派遣された。グレゴリウス 1 世は法王権が東ローマに頼ることはできないと悟り, ゲルマン民族を改宗させてローマ教会の支持者に変えるべきだと考え, アングロ・サクソン人の改宗に最大の努力をつぎ込んだ。これにともないブリテン島には教会, 修道院, 学校が設立され, 英語は礼拝や学問の用語となったラテン語から語を取り入れた。後に二重語を形成することになる pope(9c), priest(7c), mass(9c)などもこの時期に借入された。pope はフランス語経由の papa(17c)と, priest はラテン語から 16 世紀に再度借入された presbyter と, mass は古フランス語経由の mess(13c)と二重語を形成していく。

しかし, ヴァイキングの侵入によって教会や修道院が次々に破壊され荒廃していき学問も衰退していった。7 世紀初め頃からノルウェー人が海岸線を略奪し, 9 世紀半ばにはデーン人がブリテン島に定住し始め, 878 年ウェドモアにおいて協定を結び, デーンロー地域でのデーン人の居住が認められる。ヴァイキングたちの言語は古英語と近縁性があつたため, 民族的な融合とともに語彙の交換が促進された。古英語期に古ノルド語からは, 航海, 軍事, 法律用語, 日常の暮らしに関係のある語が借入される。しかし, 古ノルド語の借入が本格的になるのは, 民族の融合がすすむ中英語期になってからのことである。

古英語期に成立した二重語は次のとおりである。なお, 各語の後ろの数字は OED の初出年を示す。

8 世紀[Germanic] thrash(800)/thresh(800), naught(825)/nought(897) 9 世紀[Germanic] stink(725)/stench(900), stitch(897)/stick(900), then(695)/than(825), too(888)/to(893), bellows(800)/belly(950), deal(800)/dole(1000), whole(971)/hale(1000), of(855)/off(971), through(700)/thorough(1000) 10 世紀[Germanic] cot(893)/cote(1034), dike(847)/ditch(1043), enough(1000)/enow(1033); [Italic] inch(1000)/ounce(1000) 11 世紀[Germanic] bench(1000)/bank³(1050)

3 中英語期の二重語

中英語期に生じた二重語は 147 組(イタリック系 90 組, ゲルマン系 32 組, ギリシア語系 25 組)ある。13 世紀には二重語の一方の語が古フランス語や古ノルド語を経由したものが多く, 14 世紀 15 世紀には古

フランス語を経たものが増加し、ゲルマン系二重語は減少する。二重語の経路の組み合わせで一番多いのは、二語ともがフランス語を経たイタリック系二重語で 45 組(中英語期の二重語全体の 30.6%)ある。二番目に多いのがラテン語直接借入対フランス語経由の組み合わせで 39 組(26.5%)ある。ゲルマン系二重語では二語とも古英語内で生じたものが 14 組(9.5%)で一番多く、次に一方の語が古ノルド語を経たもの 9 組(6.1%)が続く。ギリシア語系二重語はすべてラテン語を経たものである。

1066 年のノルマン・コンクエストは、北西部フランスとブリテン島をつなぐ単一の貴族社会を成立させ、イングランドを北フランス文化圏に組み入れた。この征服によりイングランドの支配階級は英語ではなくフランス語を話す人々となり、フランスの政治制度が持ち込まれた。また、中世の文化と学問の担い手である教会の上層部も、フランス系の人々によって占められることになった。それは大陸からの大規模な文化受容の機会となり、大量のフランス語流入を意味するものでもあった。英語に取り入れたフランス語は 1250 年から 1400 年までが最も多く、その借入を Jespersen & Koszul は全フランス借入語の 41.7%、Baugh は 40.5%、Mossé は 33.1%と試算している⁵⁾。頂点に達するのは百年戦争たけなわの 1350 年から 1400 年である。

初期中英語期の言語状況はラテン語、フランス語、英語の三言語併用であり、14 世紀から 15 世紀はフランス語、英語の口語二言語併用になり、15 世紀から 16 世紀以降は英語の単一言語使用に落ち着くことになる。それぞれの使用域(Registers)はラテン語が正式・公用の文語として、フランス語が正式・公用の文語/口語として、英語が非正式・口語体の口語として使用されていた⁶⁾。さらにデンロー地域のイングランド北部は英語と古ノルド語の二言語併用であった。当時のイングランドでの多言語併用は 13 世紀の法廷が典型的な例を示している。初めに行なわれる訴答はフランス語で行われ、必要に応じて英語に訳され、法廷中はフランス語、時には英語が使用され、法廷記録はラテン語で書かれた⁷⁾。法廷におけるフランス語使用は英語の単一言語使用となった後までも続いた。1362 年には英語で弁論を行い判決を言い渡すことが規定されたが実施に至らず、17 世紀の法律学校の講義はなおもフランス語で行なわれていたという⁸⁾。このような二言語併用の社会においては言語干渉(linguistic interference)が生じ、語の借入が活発になったことを、13 世紀から 14 世紀にかけてのフランス語借入の増大が示している。

フランス語借入は、初期においてはフランス語を話すノルマン人と接触したイギリス人が取り入れた語が、その後はフランス語を話すのになれたイギリス人によって英語に持ち込まれた語が多くなる⁹⁾。借入の領域はノルマン体制を反映したものであり、政治、軍事、法律、経済、宗教、芸術、日常生活に関わるものなどあらゆる分野にわたっている。王の権力と地位に関係ある語として、ギリシア語起源でラテン語とアングロ・フレンチを経た crown(14c)と、ラテン語起源で中フランス語経由の royal(14c)がある。crown は 10 世紀半ばに *Lindisfarne Gospels* で「キリストの棘の冠」の意味でラテン語から直接借入されるが、中英語期に再度アングロ・フレンチを経て「王冠」の意味で入り同一語となり、ラテン語から借入された corona(17c)と二重語を形成した。royal は古フランス語経由の regal(14c)とスペイン語経由の real(17c)で三重語を形成する。政府の組織や財政上の借入語では、ゲルマン起源で古フランス語とアングロ・フレンチを経た guardian(15c)や、ラテン語起源でフランス語を経た tax(13c)/task(12c)があり、また、ラテン語起源で古フランス語を経た due(14c)と debt(13c)はラテン語直接借入の debit(15c)と三重語を形成した。ノルマン王朝の知行封建制を反映する task も tax も中英語期初期においては「租税」の意味で用いられほとんど同一語の異形といえるものであった。法律関係では、blame(12c)/blaspheme(14c)や custom(12c)/consuetude(14c)があり、後者はファッション関係で入った costume(18c)と三重語を形成した。

フランス語経由の借入語に多くの二重語を生じさせた要因の一つに、フランス語内で生じた音変化を経た中央フランス語と変化を受けない古北部方言やアングロ・フレンチとの両方から借入したことがあげられる。フランスにおいて 1173 年にパリ地方の方言による最初の詩 *Die de saint Thomas Becket* が書かれ、この頃からパリ方言が他の方言よりも優位に立ち始める。フランスのカペー朝の尊厳王フィリップは 1204 年にイングランド王ジョンからノルマンディーなどの領地を奪って王権を拡大し、パリが政治の中心になったことによってその地方のフランス語が優勢となる。一方、ノルマンディー方言の特徴をもつアングロ・フレンチはイングランドにおいて英語の影響を強く受け、フランスで話されていた他の方言と全

く違ったものになっていた。アングロ・フレンチは 14 世紀まではその言語で書かれた作品が多数見られるが、13 世紀末にはもはや生きた言語ではなく、私信や上流市民階級、貴族、上級聖職者、法律家という特定階級間のみで存在し続けた¹⁰⁾。フランス語からの借入は 1250 年以前はアングロ・フレンチから、それ以降は中央フランス語からの語が多くなる。フランス語の方言の差から二重語となった例として、*catch* (13c)/*chase* (14c), *treason* (13c)/*tradition* (15c), *launch* (14c)/*lance* (14c), 前述の *task* (12c)/*tax* (15c), *convey* (13c)/*convoy* (14c) があり、前者はアングロ・フレンチまたは古北部方言経由で後者が中央フランス語経由である。*treason* は、*exile*, *rebel*, *traitor* などと同時代にフランス語から借入されているが、これらの語はノルマン体制に対してイギリス人がどのように立ち向かったかを推測させる語である¹¹⁾。また、*tradition* はウィクリフによる聖書の翻訳において「口頭で伝えられた規則」という意味で取り入れられた。

フランス語からの借入は 14 世紀に頂点を迎えるが、13 世紀末から 14 世紀のイングランドにおいてフランス語は次第に使われなくなる。ノルマンディー喪失や百年戦争などによって平和的な交流が途絶え敵対感情が際立っていき、敵国語となったフランス語は廃用への傾向が強くなり、ペストの流行による労働力不足から国民大衆の地位の向上や裕福な中産階級の台頭とあいまって、英語の復権が確かなものになっていった。

アルフレッド大王はデーン人の侵略によって荒廃していた教会や修道院を復興して学問を奨励し教育を広める努力をしたが、キリスト教が本格的復興を果たすのは 10 世紀後半になってからである。910 年にフランスのクリュニーにベネディクト戒律をより厳格に守るブルゴーニュ修道院が設立され、ヨーロッパ各地の修道院において同様の修道院改革の運動が起きた。イングランドの修道士たちもフランスの修道院で改革の精神を学びイングランドへもち帰り、教会の復興のみならず学問の復活に寄与した。特に 10 世紀後半から 11 世紀にかけてダンスタンらによって熱心に推進された修道院改革の過程で書かれた翻訳文学、説教、聖人伝を通して、教会に関する語や学術用語のラテン語が多く借入された¹²⁾。また、ノルマンディー公ウィリアムは修道院改革を率先してノルマンディーに導入し、イングランド征服の折にはローマ法王庁で改革の指揮をとっていた後の法王グレゴリウス 7 世によって法王特許による聖職とすることができた。ヘイスティングズの勝利の後、彼は法王庁との約束であった教会の改革をイングランドにおいても厳格に実行して教会組織を掌握した。イングランドにおける聖職者の学識が急速に高まり多くの学校が設立された。ギリシア語起源でラテン語を経由した *chair* (13c), *primer* (15c), *history* (14c), *paper* (14c), ラテン語起源の *chapel* (13c) などがその折に借入され¹³⁾、その後二重語を形成することになる。*history* は、古フランス語を経て 13 世紀に入った *story* 「物語」と、14 世紀にラテン語から再度直接借入された *story* 「階層」とで三重語を形成した。*paper* は古英語期にもラテン語 *papyrus* の一時的借入がなされたが本格的に借入されたのは 14 世紀で *papyrus* (14c) と二重語になり、*chapel* はフランス語を経て 16 世紀に入った *chapeau* と二重語を形成した。また、この時代に借入されたフランス語語彙は宗教のほとんどすべての分野にわたっている。修道院生活や教会の礼拝におよび宗教的な抽象的概念に関係する二重語としては、古フランス語経由の *hermit* (13c) とラテン語直接借入の *eremite* (12c), 古フランス語経由の *preach* (13c) とラテン語からの *predicate* (16c), いずれも古フランス語を経た *piety* (14c) と *pity* (13c) などがある。

古英語期のデーン人侵入にともなう古ノルド語からの借入が本格的になるのは前述したように中英語期からである。これは古英語期に借入がなかったからではなく文語として現われるのが遅く 1200 年以後に見られるからである。中英語期の古ノルド語の借入はあらゆる分野にわたり、内容語のみならず機能語も借入されている。これらの借入語は、ラテン語やフランス語からのものとは異なり、より生活に密着した語として今日に至っている。古ノルド語の借入語の中には、語源的に対応する古英語を押し退けた場合もあるが本来語と並存して二重語となったものがある。古ノルド語経由の *raise* (13c), *skirt* (13c), *scatter* (12c) が、古英語経由の *rear* (10c), *shirt* (10c), *shatter* (14c) とそれぞれ二重語を形成した。また、古ノルド語で方言的変異形と標準語形とで二重語になったものに *kirk* (12c) と *church* (7c) がある。その他の二重語としては、*park* (13c) と古英語経由の *paddock* (7c), *wile* (12c) とフランク語と古フランス語を経た *guile* (13c) などがあり、二語とも古ノルド語を経由した二重語は *warble* (13c)/*whirl* (13c) や *band* (12c)/*bond* (13c) など、いずれも 13 世紀に二重語を形成することになった。

1091年にノルマン人がシチリアを征服するとともに、各地の地中海商業根拠地がサラセン人の手から奪回されてヨーロッパの商業交通が地中海地域にも確保され、貿易が活性化して北ヨーロッパの毛織物の輸出が大幅に伸びることになった。その中心地はフランドル、ピカルディ、ロンバルディアであり、イングランドは大量の羊毛生産国として羊毛工業地帯に原料を提供することになった。10世紀半ば以降イングランドはフランドルへ羊毛を輸出しており、エドワード3世の時代にはフランドル人の職工を多数イングランドへ移住させた。さらに宗教改革にともなう信仰上の理由からイングランドに様々な職種のフランドル人が移住してきた。低地ドイツ語からの借入語には織物関係の用語が多いが、商業、海事、軍事用語なども含まれた。ラテン語起源でオランダ語経由の *geneva* (18c) はラテン語からの *juniper* (14c) と、*mart* (15c) は古北部フランス語を経た *market* と、ゲルマン起源で古オランダ語と古フランス語を経た *hale* (13c) と古英語経由の *haul* (16c) とが二重語となった。オランダ語からは他に *clock* (14c), *hoyden* (16c), *leaguer* (16c), *wagon* (16c) などが借入され二重語を形成することになった。

中英語期に二重語となったものは次のとおりである。

12世紀 [**Italic**] *drake* (1000)/*dragon* (1200), *lobster* (1000)/*locust* (1200); [**Greek**] *church* (696)/*kirk* (1200); [**Germanic**] *as* (1000)/*also* (1200), *nay* (1175)/*no* (1200), *truth* (893)/*troth* (1175), *bench* (1000)/*bank*³ (1050)/*bank*¹ (1200) **13世紀** [**Italic**] *dainty* (1225)/*dignity* (1225), *mass* (900)/*mess* (1300), *paralysis* (1000)/*palsy* (1300), *rout* (1200)/*route* (1225), *sergeant* (1200)/*servant* (1225), *spirit* (1250)/*sprite* (1300), *task* (1114)/*tax* (1290), *state* (1225)/*estate* (1230), *peer* (1215)/*pair* (1278), *reason* (1225)/*ration* (1550), *chattel* (1225)/*capital* (1225), *chattel* (1225)/*capital* (1225)/*cattle* (1275), *ensample* (1297)/*sample* (1300), *charge* (1297)/*cark* (1300), *hostel* (1250)/*hospital* (1300), *dish* (700)/*dais* (1259); [**Greek**] *chirurgion* (1297)/*surgeon* (1300), *dropsy* (1290)/*hydropsy* (1300), *hermit* (1200)/*hermit* (1205), *parson* (1250)/*person* (1225), *pine* (1160)/*pain* (1297), *scandal* (1225)/*slander* (1290); [**Germanic**] *band* (1200)/*bond* (1250), *daft* (1000)/*deft* (1220), *yard* (1000)/*garden* (1300), *wile* (1154)/*guile* (1225), *paddock* (700)/*park* (1260), *wise* (971)/*guise* (1300), *rear* (1000)/*raise* (1240), *shirt* (1000)/*skirt* (1300), *sleek* (1220)/*slick* (1220), *tenth* (900)/*tithe* (1200), *whirl* (1290)/*warble* (1300) **14世紀** [**Italic**] *avow* (1220)/*advocate* (1340), *arc* (1386)/*arch* (1391), *chance* (1297)/*cadence* (1384), *canker* (1000)/*cancer* (1391), *catch* (1205)/*chase* (1314), *clause* (1225)/*close* (1325), *cloak* (1275)/*clock* (1371), *conduit* (1340)/*conduct* (1400), *confound* (1300)/*confuse* (1330), *convey* (1300)/*convoy* (1375), *degree* (1290)/*degrade* (1325), *direct* (1374)/*dress* (1375), *gin* (1200)/*engine* (1386), *fate* (1374)/*fay* (1393), *foil* (1330)/*full* (1377), *lance* (1393)/*launch* (1400), *mayor* (1297)/*major* (1400), *mystery* (1315)/*ministry* (1382), *mint* (725)/*money* (1330), *pass* (1297)/*pace* (1375), *parcel* (1368)/*particle* (1380), *pity* (1225)/*piety* (1310), *plumb* (1300)/*plunge* (1380), *pole* (1050)/*pale* (1330), *privy* (1225)/*private* (1380), *rule* (1225)/*rail* (1320), *ransom* (1300)/*redemption* (1340), *respite* (1290)/*respect* (1391), *sect* (1380)/*set* (1387), *special* (1225)/*especial* (1400), *subtle* (1300)/*subtile* (1390), *treason* (1225)/*tradition* (1382), *debt* (1300)/*due* (1340), *royal* (1374)/*regal* (1374), *custom* (1200)/*consuetude* (1382), *chief* (1330)/*cape* (1386), *gentle* (1225)/*gentile* (1400), *quit* (1225)/*coy* (1330)/*quiet* (1382), *dish* (700)/*dais* (1259)/*desk* (1386); [**Greek**] *adamant* (885)/*diamond* (1310), *blame* (1200)/*blaspheme* (1340), *cholera* (1386)/*cholera* (1386), *coffer* (1300)/*coffin* (1330), *cope* (1350)/*coup* (1400), *date* (1290)/*dactyl* (1398), *hemorrhoids* (1398)/*emerods* (1400), *paper* (1341)/*papyrus* (1388), *plum* (725)/*prune* (1345), *terebinth* (1382)/*turpentine* (1398), *tone* (1340)/*tune* (1387), *story*¹ (1225)/*history* (1390)/*story*² (1400); [**Germanic**] *dint* (897)/*dent* (1325), *spy* (1250)/*espy* (1330), *utter* (901)/*outer* (1410), *scatter* (1154)/*shatter* (1330), *shrub* (972)/*scrub* (1398), *snatch* (1225)/*snack* (1300), *spinner* (1220)/*spider* (1340), *staff* (725)/*stave* (1398), *stretch* (900)/*straight* (1400), *ring* (950)/*rink* (1375)/*range* (1375) **15世紀** [**Italic**] *abridge* (1340)/*abbreviate* (1450), *channel* (1300)/*canal* (1449), *contenance* (1340)/*countenance* (1486), *dungeon* (1375)/*dominion* (1430), *amend* (1220)/*emend* (1485), *squire* (1290)/*esquire* (1475), *spawn* (1400)/*expand* (1432), *fan* (800)/*van* (1450), *illuminate* (1432)/*limn* (1440), *manure* (1400)/*manoeuvre* (1479), *market* (1154)/*mart* (1437), *pennon* (1375)/*pinion* (1440), *polish* (1300)/*polite* (1450), *property* (1380)/

propriety(1486), pursue(1290)/prosecute(1432), prolong(1426)/purloin(1440), release(1297)/relax(1420), retreat(1375)/retract(1432), surety(1374)/security(1432), sire(1205)/senior(1432), spend(1175)/expend(1440), tract(1432)/trait(1477), onion(1356)/union(1432), debt(1300)/due(1340)/debit(1450), imply(1374)/employ(1460), aim(1382)/esteem(1460), primero(1386)/primer(1470), ravin(1340)/rapine(1420), ravin(1340)/rapine(1420)/ravine(1450), ensample(1297)/sample(1300)/example(1447), die(1393)/date(1430), Barbary(1300)/brave(1485); [Greek] anthem(1000)/antiphon(1500), barge(1300)/bark(1475), dolphin(1300)/dauphin(1485), minster(900)/monastery(1432), pose(1374)/pause(1440), poesy(1300)/posy(1430); [Germanic] brown(1000)/bruin(1481), draw(950)/drag(1440), warden(1225)/guardian(1477), pond(1300)/pound(1425), road(888)/raid(1425), bench(1000)/bank³(1050)/bank¹(1200)/bank²(1474), ring(950)/rink(1375)/range(1375)/harangue(1450)

4 近代英語期の二重語

近代英語期に二重語となったものは165組(イタリック系114組, ゲルマン系28組, ギリシア語系23組)ある。二重語の借入経路は, ラテン語直接借入対フランス語経由の組み合わせが一番多くて72組あり, 近代英語期における二重語の43.6%を占め, 二番目は二語ともフランス語経由のもので30組18.2%である。16世紀と17世紀の二重語はロマンス語経由対ラテン語直接借入で二重語になるものが非常に多くなる。ゲルマン系二重語は, 一方の語が外国語, 特にオランダ語を経由する組み合わせが増える。またギリシア語系では, イタリア語やスペイン語などのロマンス語経由の語が英語に入ってきた二重語が出現する。

ルネサンスはまさにヨーロッパの知的覚醒であり, イギリスには1500年ごろに押し寄せることになる。ルネサンス期の英語語彙の特徴をHughesは“exuberance, expansion, experiment, exploration, individualism, above all a creative excitement, even a ferment”であると指摘している¹⁴⁾。1500年から1649年にかけての新語数は26,947語で, ピークは1600年から1619年の5,192語であり, 1600年から1609年の新語2,755語のうち38.5%(1603語)がラテン語起源とギリシア語起源のものであった¹⁵⁾。ルネサンス期は, 多くのラテン語が借入され, ラテン語の影響の第4期といわれる。

ルネサンスの結果, 英語に関して二つの問題点が明らかになったとSheardは指摘している¹⁶⁾。一つは, 宗教, 学問, 教育の分野におけるラテン語に対する英語の位置づけである。ラテン語が学問用言語として当時の世界共通語で適確に表現できる言語であるに対して, 英語はいまだ未熟な言語で古典語のように正確に表現できる言語ではないと, イギリス人は感じていた。そのためベーコンやトマス・モアを初めとする学識者たちは自国語ではなくラテン語で著作した。二つには, ラテン語やギリシア語を使わない人々の間でも, ギリシア・ローマ古典の叡智の恩恵に与りたいという希望が吹き出てきたことである。そして, 16世紀には古典時代の大部分の著作が次々と英語に翻訳され出版された。学問用語として, ラテン語直接借入のdatum(17c)がイタリア語経由のdado(17c)と古フランス語経由のdate(15c), die(14c)とで四重語を, ラテン語からspecies(16c)が古フランス語経由のspice(13c)と, ギリシア語起源でラテン語経由のnausea(16c), thesaurus(17c)が古フランス語を経たnoise(13c), treasure(12c)とそれぞれ二重語となった。

ルネサンスの発祥地イタリアからは, 貿易やイタリア旅行の流行などを通じて, チューダー王朝期から始まり1500年から1650年にかけておびただしい語彙が借入される。称号, 呼称, 服飾, 軍事, 馬術, 商業用語, とりわけ芸術, 建築, 文学, 音楽の分野で多様な語彙を取り入れことになる¹⁷⁾。イタリア語に関わる二重語として, madonna(16c)が古フランス語を経たmadam(13c)と, compliment(16c)が古フランス語を経たcomplement(14c)と, attitude(17c)が後期ラテン語からのaptitude(16c)と, influenza(18c)がフランス語経由のinfluence(14c)となど, 多くの例がある。

イギリスのルネサンスは宗教改革と平行して進んでいった。1229年のトゥールーズ公会議において聖書全体を自国語(vernacular)に翻訳することは禁じられていたが, 実際には1500年までにスペイン語, イタリア語など6カ国語に翻訳されていた¹⁸⁾。イギリスにおいては, 宗教改革の先駆者ウィクリフが1380

年ごろラテン語聖書を英語に翻訳した。のち、エラスムスの影響を受けたティンダルがギリシア語新旧約聖書の英訳に取り組み 1525 年にはケルンで新約聖書を完成して、死後 *Matthew Bible* (1537 年)として合法的に出版された。1611 年には『欽定訳聖書』が出され、英国国教会における使用が義務づけられた。この『欽定訳聖書』はティンダルの業績を継承したものであり、欽定訳の新約聖書の 90%は彼の訳であった¹⁹⁾。

ルネサンスとともに入ってきた新しい概念を表現するため、また、翻訳をする過程で、用語をラテン語やギリシア語から直接借入することになった。ラテン語からの科学用語 *cylinder* (16c) とフランス経由の *calendar* (16c), *terminus* (16c) と古フランス語経由の *term* (13c), *datum* (17c) とイタリア語経由の *dado* (17c) などの二重語がこの時期に生じた。法律用語としては、*legal* (16c)/*leal* (13c)/*loyal* (16c) が三重語を、*pauper* (16c) と古フランス語経由の *poor* (12c) が二重語となる。また、教会用語として *devote* (16c), *predicate* (16c) が借入され、中英語期に入っていた *devout* と *preach* とそれぞれ二重語を形成した。

1660 年の王政復古で亡命先のフランスから帰国したチャールズ 2 世は、フランスの概念や習慣を持ち帰り、宮廷人をはじめとして上流社会にフランス語の大きな影響が現われ、日常の会話にもフランス語の語句を用いるのが流行し、社交社会、服飾、優雅な趣味に関わるものや、建築、都市計画、動産などの語彙が借入された。二重語に関わる借入語として、*chaise* (18c), *boulevard* (18c), *salon* (17c)/*saloon* (18c) などがある。*chaise* はギリシア語起源でラテン語とフランス語を経て英語に入り、13 世紀に入っていた *chair* と 17 世紀にラテン語経由の *cathedra* と三重語になった。また、*boulevard* はゲルマン起源で中オランダ語と古フランス語を経てフランス語から入り、中オランダ語経由の *bulwark* (15c) と二重語を形成した。

Mossé によるとフランス語借入が 19 世紀前半に増加を示している²⁰⁾。これは、ロマン主義の高揚により芸術や文学の用語とか、衣服、装飾、家具などの語彙が入ってきたためである。この時代に *motif* が借入され、14 世紀に借入されていた *motive* と二重語になった。

15 世紀末にヨーロッパ世界は新局面にはいる。新大陸発見や喜望峰を経由する新航路の発見で、西ヨーロッパ諸国の植民地競争が激しくなる。イギリスもアメリカをはじめ、インド、オーストラリア、アフリカなどで次々に植民地を獲得して帝国の拡大を図り、今まで借入したことのない言語からも借入が増えることになる。この背景を受けて生じた二重語に、*track/trek* がある。*trek* (19c) はゲルマン起源で中オランダ語、オランダ語を経て南アフリカのオランダ語から入り、古フランス語と中フランス語を経て入っていた *track* (15c) と二重語を形成した。

近代英語期に二重語になったのは次のとおりである。

16 世紀 [Italic] *aggrieve* (1330)/*aggravate* (1530), *ally* (1297)/*alloy* (1598), *amiable* (1350)/*amicable* (1532), *army* (1386)/*armada* (1553), *avaunt* (1485)/*advance* (1509), *calendar* (1513)/ *cylinder* (1570), *chaste* (1225)/*caste* (1555), *chivalry* (1300)/*cavalry* (1591), *chapel* (1225)/*chapeau* (1523), *complement* (1398)/ *compliment* (1578), *comprise* (1423)/*comprehend* (1584), *cope* (1205)/*cape* (1565), *grate* (1412)/*crate* (1526), *deliver* (1325)/*deliberate* (1548), *devout* (1225)/*devote* (1586), *distract* (1600)/*distract* (1600), *feat* (1362)/*fact* (1539), *fashion* (1463)/*faction* (1509), *fealty* (1375)/*fidelity* (1508), *farm* (1386)/*firm* (1574), *foil* (1390)/*folio* (1553), *granary* (1175)/*garner* (1570), *invite* (1533)/*vie* (1533), *madam* (1297)/*madonna* (1584), *memory* (1340)/*memoir* (1567), *musket* (1425)/*mosquito* (1583), *pageant* (1380)/*page* (1589), *pale* (1300)/*pallid* (1590), *poor* (1200)/*pauper* (1516), *pestle* (1272)/*pistil* (1578), *preach* (1225)/*predicate* (1552), *prove* (1200)/*probe* (1563), *portray* (1330)/*protract* (1547), *poignant* (1400)/*pungent* (1597), *purpose* (1292)/*propose* (1548), *ray* (1483)/*radius* (1597), *sure* (1340)/*secure* (1533), *spice* (1225)/*species* (1559), *strait* (1290)/*strict* (1592), *survey* (1467)/*supervise* (1588), *source* (1346)/*surge* (1511), *term* (1300)/*terminus* (1571), *treble* (1374)/*triple* (1551), *vowel* (1308)/*vocal* (1582), *cull* (1330)/*collect* (1573), *stencil* (1420)/*tinsel* (1502), *aim* (1382)/*esteem* (1460)/*estimate* (1532), *primero* (1386)/*primer* (1470)/*premier* (1526), *leal* (1300)/*legal* (1529), *leal* (1300)/*legal* (1529)/*loyal* (1531), *case* (1300)/*chase* (1580), *case* (1300)/*chase* (1580)/*cash* (1596), *radish* (1000)/*race* (1547), *radish* (1000)/*race* (1547)/*radix* (1571), *quit* (1225)/*coy* (1330)/*quiet* (1382)/ *quietus* (1540), *champaign* (1400)/*camp* (1528); [Greek] *daffodil* (1548)/

asphodel(1578), base(1325)/basis(1571), card(1400)/chart(1571), choir(quire)(1300)/chorus(1561), jealous(1382)/zealous(1535), noise(1225)/nausea(1569), palsy(1300)/paralysis(1525), priest(601)/presbyter(1597), sponge(1000)/spunk(1536), treacle(1340)/theriac(1562), treasure(1154)/thesaurus(1562), triumph(893)/trump(1529), crypt(1432)/grot(1506), Barbary(1300)/brave(1485)/barbarous(1526)/bravo(1597); [Germanic] bleach(1200)/bleak(1566), shock(1576)/chuck(1583), flitch(700)/fleck(1598), warranty(1388)/guaranty(1597), ward(1035)/guard(1583), hale(1300)/haul(1581), heathen(971)/hoyden(1593), lair(893)/leaguer(1577), lodge(1290)/lobby(1553), school(1400)/shoal(1578), screech(1577)/shriek(1577), shove(900)/scuffle(1590), snivel(1325)/snuffle(1583), sprout(1200)/spurt(1570), stint(1200)/stunt(1583), wain(725)/wagon(1523), wight(888)/whit(1520), wroth(950)/wrath(1536), ring(950)/rink(1375)/range(1375)/harangue(1450)/rank(1570) 17世紀 [Italic] aptitude(1548)/attitude(1668), cant(1519)/chant(1671), canzone(1590)/chanson(1609), complete(1380)/comply(1602), count(1325)/compute(1631), construe(1399)/construct(1663), annoy(1230)/ennui(1667), exploit(1400)/explicit(1613), feeble(1175)/foible(1673), fee(1292)/feud(1614), found(1390)/fuse(1681), frail(1382)/fragile(1607), ensign(1475)/insignia(1647), intricate(1579)/intrigue(1612), livery(1300)/liberate(1623), naive(1374)/native(1654), neat(1542)/nitid(1654), pope(900)/papa(1681), portico(1290)/porch(1605), repair(1320)/repatriate(1611), suit(1297)/suite(1673), traverse(1400)/transverse(1621), cull(1330)/collect(1573)/coil(1611), imply(1374)/employ(1460)/implicate(1610), state(1225)/estate(1230)/status(1693), peer(1215)/pair(1278)/par(1662), stencil(1420)/tinsel(1502)/scintilla(1692), reason(1225)/ration(1550)/ratio(1636), royal(1374)/regal(1374)/real(1611), charge(1297)/cark(1300)/cargo(1657), hostel(1250)/hospital(1300)/hotel(1644), gentle(1225)/gentile(1400)/genteel(1628)/jaunty(1674), plain(1330)/plane(1646)/piano(1683), champaign(1400)/camp(1528)/campaign(1628)/campus(1646), die(1393)/date(1430)/datum(1646)/dado(1664), dish(700)/dais(1259)/desk(1386)/discus(1656); [Greek] crown(950)/corona(1652), chair(1300)/cathedra(1635), crypt(1432)/grot(1506)/grotto(1617), place(950)/plaza(1683); [Germanic] attach(1362)/attack(1600), shame(725)/sham(1677) 18世紀 [Italic] bouquet(1716)/bosket(1737), castle(1075)/chateau(1789), common(1300)/commune(1792), queue(1592)/cue(1731), deposit(1660)/depot(1794), feast(1225)/fete(1752), juniper(1400)/Geneva(gin)(1706), influence(1374)/influenza(1743), maxim(1426)/maximum(1743), mobile(1490)/mob(1711), moment(1340)/momentum(1735), puppy(1486)/pupa(1773), secret(1399)/secrete(1728), ruby(1310)/rouge(1753), custom(1200)/consuetude(1382)/costume(1715), plain(1330)/plane(1646)/piano(1683)/plan(1706), dish(700)/dais(1259)/desk(1386)/discus(1656)/disk(1715); [Greek] air(1300)/aria(1742), chamber(1300)/camera(1708), chair(1300)/cathedra(1635)/chaise(1701); [Germanic] bulwark(1418)/boulevard(1769), chare(1000)/chore(1746), ticket(1528)/etiquette(1750), furnish(1477)/veneer(1728), salon(1699)/saloon(1728) 19世紀 [Italic] design(1593)/designate(1801), insulate(1538)/isolate(1807), motive(1362)/motif(1848), reply(1385)/replica(1824), chief(1330)/cape(1386)/chef(1847); [Greek] tansy(1265)/athanasy(1829), phasis(1660)/phase(1812); [Germanic] gnaw(1000)/nag(1825), track(1470)/trek(1849), ring(950)/rink(1375)/range(1375)/haranque(1450)/rank(1570)/ranch(1845) 20世紀 [Greek] place(950)/plaza(1683)/pizza(1935)

5 おわりに

語の歴史をたどることは、その民族の歴史をたどることである。特に借入語は、それぞれの民族がたどってきた異文化接触の歴史の生き証人であり文化遺産である。友好国や敵国との接触の結果として、また時には屈辱的な従属関係の結果として、あるいは民族と民族の融合の結果として、語が借入されていく。歴史的出来事が語の借入を誘発し、また語の借入がその時代の概念形成に影響を及ぼし、さらなる借入を招く。国語純粋主義者は自国語の乱れを危惧して外国語流入に抵抗を試みる。しかし、長期的には語彙の借

入を作為的に食い止めることはできない。借入は、その時代に生きる人々の主体的選択であるからだ。

イタリック系、ゲルマン系、ギリシア語系二重語は、16世紀に成立したものが一番多く、14世紀がそれに続く。16世紀に成立した二重語は14世紀に借入されていた語との組み合わせが多く、14世紀に成立したのは13世紀に借入されていた語との組み合わせが多い。また、二重語の借入経路で一番多かったのは、ラテン語からの直接借入対フランス語経由の組み合わせで111組(二重語全体の33.8%)あり、16世紀、17世紀、14世紀の順に多い。これら二重語を形成した大きな要因はルネサンスと宗教改革であり、この時代に増えたラテン語からの直接借入された語と中英語期に流入していたフランス語が二重語を生んだ。二重語を形成している語でラテン語から直接借入された131語のうち、16世紀と17世紀の借入が60語(ラテン語借入語の45.8%)で、14世紀が23語(同17.6%)ある。二番目に多い借入経路の組み合わせは、二語ともがフランス語経由で借入された二重語で、75組(二重語全体の22.9%)ある。特に14世紀を頂点として16世紀と15世紀がそれに続いている。フランス語からの語のそれぞれの借入時期を見ると14世紀と13世紀が一番多く、フランス語からの借入語320語のうち14世紀に105語、13世紀に98語が入り、フランス語からの借入語の63.4%がこの時期に集中している。これは、14世紀にノルマン・コンクエスト以来の政治的・社会的状況下でフランス語と英語の二言語併用から英語の一言語使用へと移行し、溢れんばかりのフランス語が英語に入ったためである。

ヨーロッパの文化の主要な三要素は、ゲルマン民族の精神、キリスト教、古典古代の伝統だといわれる。それぞれの時代にこの三要素が絡み合いながらヨーロッパの発展に寄与してきた。英語語彙における二重語群は、その有力な例証である。古英語期から中英語期にかけて見られるアングロ・サクソン人、デーン人、ノルマン人たちの精神の高揚、古英語期の布教に始まるキリスト教化と中英語期の教会組織の発展、近代英語期に見られるギリシア・ローマ古典の復活などが、英語語彙における二重語を形成する要因となったのである。二重語の借入経路の研究は、借入語が語源となった言語の文化に、経由した言語の文化を重ね合わせて英語に入ってきた過程や様態の研究であり、言語のもつダイナミックな活力に触れる研究でもある。いまや、イギリスという島国だけの言語であることを超え、グローバル・ヴィレッジの言語となった英語は、語彙の豊かさや混濁性ゆえに世界共通言語としての資質を持ち合わせていたといえる。

引用文献

- 1) Jackson, Howard & E. Z. Amvela. *Words, Meaning and Vocabulary*. London: Cassell, 2000, p.32.
- 2) Hughes, Geoffrey. *A History of English Words*. Oxford: Blackwell, 2000, p.370.
- 3) Serjeantson, Mary S. *A History of Foreign Words in English*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner, 1935, pp.277-81.
- 4) Baugh, Albert C. & Thomas Cable. *A History of the English Language*. 3rd ed. N. J. : Prentice-Hall, 1963, p.77.
- 5) Mossé, Fernand. "On the Chronology of French Loan-Words in English". *English Studies* 25. Amsterdam: Swets & Zeitlinger N. V. , 1943, p.38.
- 6) Crespol, Begona. "Historical Background of Multilingualism and its Impact on English." *Multilingualism in Later Medieval Britain*. Ed. D. A. Trotter. Cambridge: D. S. Brewer, 2000, p.25.
- 7) Brand, Paul, "The Languages of the Law in Later Medieval England." *Multilingualism in Later Medieval Britain*. Ed. D. A. Trotter. Cambridge: D. S. Brewer, 2000, pp.64-65.
- 8) Brunner, Karl, *Die englische Sprache: Ihre geschichtliche Entwicklung* 『英語発達史』(松浪有他訳) 東京: 大修館書店, 1977, p.115.
- 9) Sheard, J. A. *The Words We Use*. London: Andre Deutsch, 1954, p.277.
- 10) 前掲, Brunner. p.115.
- 11) 前掲, Sheard. p.279.

- 12) 前掲, Brunner. p.142.
- 13) 前掲, Baugh. p.88.
- 14) 前掲, Hughes, p.146
- 15) 同上, p.153.
- 16) 前掲, Sheard. p.312.
- 17) 前掲, Serjeantson. pp.184-94.
- 18) Knowles, Gerry. *Cultural History of the English Language*. London: Arnord, 1997, p.71.
- 19) Daniell, D. *William Tyndale: A Biography*.『ウィリアム・ティンダラーある聖書翻訳者の生涯』(田川建三訳), 東京: 勁草書房, 2001, p.1.
- 20) 前掲, Mosse. p.39.

参考文献

- Barber, Charles. *The English Language—A Historical Introduction*. Cambridge: Cambridge UP. 1993.
- Barfield, Owen. *History in English Words*. New York: Lindisfarne Press. 1953.
- Bede. *Ecclesiastical History of the English People with Bede's Letter to Egbert and Cuthbert's Letter on the Death of Bede*. Trans. Leo Sherley-Prince. Harmondsworth: Penguin Books. 1990.
- Doyle, William. *The Old European Order 1660-1800*. 2nded. Oxford: Oxford UP. 1992.
- Freeborn, Dennis. *From Old English to Standard English*. 2nded. London: Macmillan Press. 1998.
- Garin, Eugenio. *La cultura del Rinascimento—Profilo storico*. 『ルネサンス文化史』(澤井繁男訳), 東京: 平凡社. 2000.
- Hardley, D.M. *The Northern Danelaw—Its Social Structure, c.800-1100*. London: Leicester UP. 2000.
- Harris, Martin and Nigel Vincent. *The Romance Languages*. New York: Oxford UP. 1990.
- Kastovsky, Dieter and Arthur Mettinger, ed. *Language Contact in the History of English*. Frankfurt am Main: Peter Lang. 2001.
- Leith, Dick. *A Social History of English*. 2nded. London: Routledge. 1997.
- McKnight, G. H. *English Words and their Background*. New York: Gordian Press. 1969.
- Platt, Colin. *Medieval England—A social history and archaeology from the Conquest to 1600 A.D.* London: Book Club Associates. 1978.
- Richter, Michael. *Studies in Medieval Language and Culture*. Portland: Four Courts Press. 1995.
- Saul, Nigel, ed. *England in Europe 1066-1453*. London: Collins & Brown. 1994.
- Smith, Jeremy. *An Historical Study of English—Function, Form and Change*. London: Routledge. 1996.
- Thomason, S. G. *Language Contact—An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh UP. 2001.
- Verhulst, Adriaan E. *The rise of Cities in North-West Europe*. Cambridge: Cambridge UP. 1999.
- 『中世都市の形成—北西ヨーロッパ』(森本芳樹他訳), 東京: 岩波書店. 2001.